

展望鏡

余計なお世話

柴生田 晴四

(経済倶楽部相談役)

原稿を書くのにパソコンを使うようになって四半世紀を超えました。字句の修正や挿入など文章の編集が大変容易になり、しかも事実関係の確認などでグーグル検索を使うこともできるため、いまやパソコンは原稿執筆に欠かせない道具になっています。

しかし、日常的に仕事で使う必需品であるだけに、使い方が開発者の都合で勝手に改変されることには、常々著しいストレスを感じ

てきました。例えばマイクロソフト社はバージョンアップと称して定期的に改良を加えた新しいソフトを市場に投入しますが、既存のユーザーに対しても新しいバージョンへの移行を促してきます。作業中の画面の上に有無を言わず出現する選択画面に回答しなければ作業には戻ることができません。「後で」を選んでとりあえずスルーすることもできますが、折に触れて出現する勧誘画面に繰り返して邪魔されることになります。

根負けしてバージョンアップを実行したらどうなるのか。ソフトの書き換えにかなりの時間が掛り、急ぎの原稿が書けなくなつて困り果てる羽目になりました。本格的なバージョンアップ以外にも細かい修正の適用を求め

る通知も頻繁にあります。うっかり適用して問題が発生しても後の祭りなので、そうならないために「詳細を見る」こともできますが、詳細を見ても意味不明の文章が長々と続き、中断した作業に戻る意欲まで失ってしまうことになりかねません。

最近では、「後で」の選択肢の代わりに「強制的に終了する」の選択しかないものがあり、この場合にはやりかけの作業を最初からやり直すしかないことになります。

開発者が不断の努力によって改良を重ねることで、より使いやすいソフトに生まれ変わっていくのなら何の文句もありません。しかし、新しい機能が加われば加わるほどソフトは複雑になり、ユーザーは作業を進めること

よりも新しい機能を習得することに精力を注ぐことになってしまいます。結局、開発者がユーザーの利益よりも自らの利益を優先していることに問題の根源があるのだと考えてしまふのです。こうしたITやインターネットの世界における市場独占が発展を続けるこの世界のゆがみを拡大させ続けているように思われてなりません。IT産業の発展に支えられている米国は知的財産権の保護を重視するあまり、独占禁止によるユーザーの重要性をなおざりにしています。パソコンやインターネットの利用によって蓄積されたビッグデータはそれを蓄積したプラットフォームの占有物ではなく、それを生み出したユーザーのものでもあるのです。